



報告書

令和2年度

海外教育(特別)(実践)

研究 D・E 台湾

令和3年3月10日



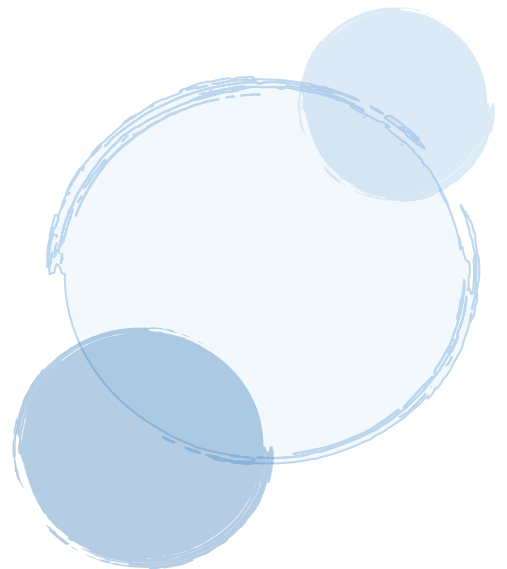
上越教育大学

目 次

参加者および指導教員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

参加学生の感想レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2-9

記録写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10-13



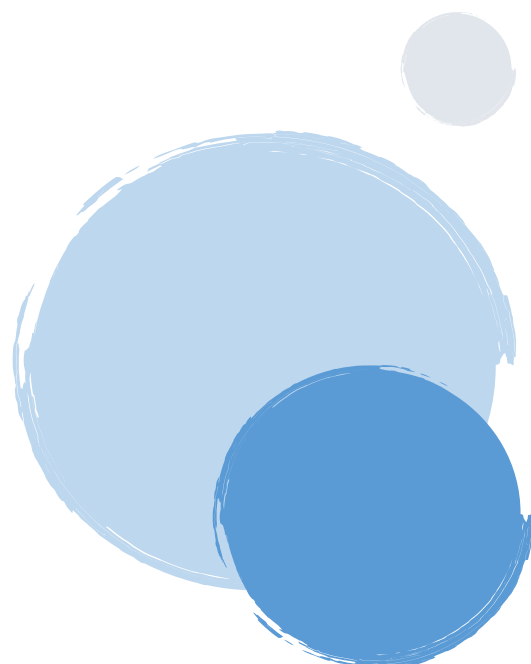
R2年度 海外教育（特別）（実践）研究D・E「台湾」参加者名簿

No.	所属1	所属2	学籍番号	学年	性別	氏名	フリガナ	備考
1	学部	言語系コース（英語）	302109B	3	男	野本 瑛資	ノモト エイスケ	
2	学部	芸術系コース（音楽）	302082H	3	女	徳永 好花	トクナガ コノカ	
3	大学院	文理深化・英語コース	20195212K	2	女	杉本 亜紀	スギモト アキ	
4	大学院	文理深化・英語コース	20195213H	2	女	高原 可央里	タカハラ カオリ	
5	大学院	国際理解・日本語教育コース	20195456C	2	男	陸 春安	リク シュンアン	
6	大学院	先端教科・領域開発研究コース	20195601P	2	男	井口 元貴	イグチ ゲンキ	
7	大学院	先端教科・領域開発研究コース	20195608G	2	男	金澤 直哉	カナザワ ナオヤ	
8	大学院	文理深化・英語コース	20195222G	2	女	吉井 千秋	ヨシイ チアキ	
9	指導教員	/			女	北條 礼子	ホウジョウ レイコ	国際理解・日本語教育コース
10	指導教員				男	周東 和好	シュウトウ カズヨシ	芸能深化・保健体育コース
11	指導教員				女	藤谷 元子	フジタニ モトコ	国際理解・日本語教育コース

学生 8名 指導教員 3名

（男性 5名 女性 6名）

感想レポート



海外教育研究 台湾 感想

言語系コース（英語）

302109B 野本瑛資

プレゼン資料作成にあたって工夫したことや実際にプレゼンをしての感想

私はこの授業を通して一番感じたことは、オンラインで外国の学校と授業をすることの難しさです。私はあまりオンラインで授業を行うという経験がなかったため、授業内容をどのようなものにしたらよいのか、どのような形式にしたら児童にとってわかりやすくなるかを考えるのが大変でした。同じグループの仲間と話し合いながら、試行錯誤してよりよいものになるように工夫しました。特に工夫したのは、授業で使う資料です。私たちのグループでは、授業でクイズ大会を行うことを考えていたので、児童が見てすぐに内容のわかる資料を作るとはとても重要なことだと感じています。また、私はオンラインで授業を行う上で、児童としっかりと意思疎通を行うためには、分かりやすい資料が大切だと考えています。そのため、私たちのグループでは、特に資料の文字の大きさや画像の大きさ・位置に気を付けて作りしました。

本番の授業では、計画していた進め方とは異なる方法で進んでいったため、その授業の流れに合わせて授業の進行方法を変えていきました。実際に授業を行うと、自分たちが事前予想してきたこととは異なること（台湾の教員による中国語での説明など）が起こったり、授業時間内に終わらせるために進めるスピードを調節したり、いろいろなことを考えて行動しなければいけなかったため、オンラインで授業を行うことの難しさを実感しました。その中でも特に、オンライン授業の難しさを実感したのは聞き手の理解がどれだけできているかを知ることです。本番の授業では、台湾の教員たちの支えもあり、自分たちが思っていたよりもすんなりと授業は進みましたが、オンラインだと対面の授業とは違い、常に子どもたちの表情を見れるわけではないので、児童がどれくらい理解しているのか読み取るのが難しいと感じました。

私はこの授業を通して、オンライン授業での方法や実際に授業を行った上で新たに発見した課題があったので、またオンライン授業をすることがあったら、しっかりと改善して、よりよい授業にしていきたいと考えています。

海外教育研究 感想

芸術系コース（音楽）

302082H 徳永好花

●プレゼンの作成にあたって工夫したこと

私は、特に伝わりやすさやわかりやすさを重視して、プレゼンの作成にあたりました。私たちの班は日本の竹文化をテーマにプレゼンを行い、その中でも私は竹で作られた日本の伝統的な楽器について紹介をしました。紹介する内容が、他にも「剣道」や「竹のおもちゃ」とさまざまだったので、できるだけ短く、簡潔に伝える必要がありました。そこで難しかったことは、どの情報をどこまで伝えるかです。私は竹で作られた日本の楽器の魅力を知ってほしいというねらいがあったので、楽器の持つ「音色」や「役割」を伝えることに焦点をあてました。そのために動画を使って、見たり、聞いたりしてもらい活動設けるよう工夫しました。言葉だけの説明では伝わりきらなかった部分を、動画を使うことで補う事ができ、よりわかりやすくなったのではないかと感じています。また、動画を使うことに加えて、スライドでは写真や図を多く取り入れることで、視覚的にわかりやすく工夫をしました。

スライドの工夫の他にも、伝え方の工夫も大切にしました。私は、あまり英語に自信がありません。はじめは本当に英語でプレゼンを作成することができるのか、そして私の英語でうまく伝えることができるのか、とても不安に感じていました。だからこそ、正しく伝えるということに特に意識しました。また、今回はプレゼンを行う対象が小学生だったため、できるだけ簡単な英語で伝えることもとても大切でした。自分ひとりでできないところや不安なところは、同じ班の大学院生の先輩方に沢山助けをいただきました。1人で考えるのではなく色々な方と相談をしながら考えていくことで、より伝わりやすい表現にすることができました。

最後に反省としてせっかく楽器を紹介したので、現地の小学生にも実際に楽器を演奏する体験をさせてあげることができたらさらに良かったのではないかと考えます。この実践をここで終わりにしてしまうのではなく、自分で機会をつくり、改善しながら何度も挑戦したいです。

●実際にプレゼンをしての感想

プレゼンを実践してまず感じたことは、伝える相手がいる嬉しさです。台湾に行くことができず、実際に児童の皆さんとも合うことができなかったのは残念でしたが、オンラインであっても子どもたちの生の反応を受け取ることができ、とても嬉しかったです。中でも児童の皆さんと活動する場面では友だち同士で楽しんでいる姿を実際に見ることができ、今までプレゼンづくりを頑張ってきたよかったです、とても達成感を感じました。

また、前述の通り私はプレゼンが始まるまで自分の英語がしっかりと伝わるのかどうか不安に感じていました。しかし、実際に向こうからの反応を受け取ることができると、その不安も消えていきました。何度も自分の発音や話す速さに気をつけて、練習やリハーサルを繰り返してきたことが、この本番に繋がったのだと思います。

緊張や不安もありましたが、今回勇気をだしてこの授業に参加したことで、自分の可能性が広がったと感じます。また、普段関わることのできない院生の皆さんとも一緒に活動する中で、さらに知識を広めて行くことができました。自分自身の成長を大きく感じることもできた実践でした。

海外教育研究（日本のお正月）の振り返り

文理深化・英語コース

20195212K 杉本 亜紀

1. 資料作成にあたり工夫したこと

先生方、吉井さん、金澤さんよりアドバイスをもらいかなり改善しました。

(1) 授業の構成

説明だけにならないように体験できるものを取り入れた。クイズや「福笑い」の活動。

(2) スライド

①何を示しているか分かるようイラストを使った。

②大きいフォント（22以上）で遠くにいる児童にも見えるようにする。

③1枚のスライドに使う文字の色は3色くらいまで。見出し語は目を引くはっきりした色（赤、青、緑など）。説明や指示、クイズの選択肢は統一した1色（黒）。

④スライドの文字数はできるだけ少なくする。

⑤福笑いの活動を行う前に、スライドで提示した後、事前に撮ったビデオを見せて福笑いの方法を伝えた。

⑥使う英語は、できるだけ簡単で短い語を使う。

⑦発表者がパワーポイントを操作する時、一度のクリックで、徐々に変化するアニメーションを使うと楽。

2. プレゼンをしての感想

まずは、台湾の児童が席についてから担当の先生の話をよく聞き授業に臨んでいる姿を見て、日ごろから規律のある中で授業が行われていると感じました。児童が理解しやすいように、先生方は細部にわたり補足説明をしたり、実物を見やすくしたりという配慮をされていて勉強になりました。私たちが準備した内容が遠隔でも伝わると感じたのは、現地の学校の配慮があったからだと思います。

そしてプレゼンをしている時、児童の反応が音声で聞こえてきたので、反応を感じとることができました。しかし、児童の画像が自分の見ているパソコンからは見られず、少し離れた位置に設定したパソコン上でしか見られなかったため、即座のやりとりがなかなかうまくいきませんでした。全体的には、何度もリハーサルを行うことができたため、本番では大きなトラブルもなく時間配分を確認しながら進めることができました。

中学校現場に戻り生徒が楽しく英語でやりとりをする授業を行いたいです。英語を使う必要性のある場面（海外の生徒とのやりとり、世界や地元の観光業の方に提案など）を設定し、毎時間教師、生徒同士で英語を使って表現（話す、書く）をしたり意思を伝えたりすることが本当に必要であると感じました。楽しくて使う必然性のある授業でないと、続かないということも身に沁みました。自律する学習者の育成のために、単元を念入りに計画していこうと強く思いました。2年間にわたり本当にありがとうございました。

台湾の小学生との交流授業について

文理深化・英語コース

20195213H 高原可央里

○授業作りで工夫した点

竹チームの授業では、1つ目に視覚的な情報を多く使うこと、2つ目に簡単な英語を使うことを意識して授業作りを行いました。

視覚的な情報では、静止画だけではなく動画も用いました。交流授業当日、画像・動画・そして楽器の演奏、剣道の素振り、竹とんぼを飛ばすなど実際の動作を示すことで、児童の理解や反応がよかったと感じています。しかし、動画を流すに至るまでは様々な困難がありました。動画で流そうと、Youtubeで動画を検索し、スライドのハイパーリンクの機能でURLに飛ぶようにしました。しかし、広告が入ったり、流したい動画の部分をピンポイントで流せなかったりしたことから、スクリーンショットの機能を使い、動画の見せたい部分のみを切り取ってスライドに貼り付けました。動画はスライド上で大きさを変えることもできるため、スクリーンショットとスライドの機能にはとても助けられました。また、児童が「エアークラウド」に挑戦した際は、スライドの他に発表者と全体側の2台のカメラを用意していただいたおかげで、動作をわかりやすく伝えることができました。オンライン授業では、スライドだけでなく、発表者の表情やジェスチャーがわかる工夫が必要だと強く感じました。

また、授業では簡単な英語を使うことを意識しました。スライドの英単語数はできるだけ少なく、文字よりも写真や動画を多く使い、また、話す英語も簡単な英語を使うことを徹底しました。発表に至るまで、グループでスクリプトやスライドを何度も確認・訂正できたからこそ、当日の児童の反応はとても良く、互いに理解を確認しながら授業を進めることができたのだと思います。グループの井口くん、徳永さんの頑張りに感謝です。

視覚的な情報を用意することはとても手間はかかりますが、児童が英語で情報を理解するためには必須だと思います。今後の国際交流授業でも、たくさんの説明を言葉でしようとせず、絵や動画、実演を交えながら授業を行うといいと思います。

○まとめ

台湾の先生方の柔軟で素早い対応に本当に感謝します。台湾の児童は大変反応がよく、意欲的に授業に取り組んでくれ、本当に嬉しかったです。ぜひ、いつか実際に小学校に訪問し、英語教育を間近で見たいです。また、コロナ禍の中でもオンラインでの授業を企画し指導してくださった北條先生、周東先生、藤谷先生、そして用具の準備や配送、オンライン機器の準備をしてくださった笹川さんをはじめ多くの方々に感謝致します。「中国製」の製品が送れないというのは、衝撃的でした。英語教育だけでなく、様々な国際事情も学ぶいい機会になりました。今までのご指導、本当にありがとうございました。

国際理解・日本語教育コース

20195456C 陸 春安

2021年3月10日、台湾嘉義大学附属小学校の生徒約60名を対象に、「The life of the snow country」というテーマで、私と教育学部の野本さんがオンライン授業をさせていただきました。

授業では、上越教育大学での留学生活や、日本の四季風景、特に雪国の冬をポイントとして紹介しました。雪国の上越でしか経験できないことなど、幅広く「台湾では体験できない冬の生活」について、話しました。

講義後に、私の「学び、気づき」として、以下のことがあげられます。

- ・海外にいる人は、日本の文化について、よりしっかりと理解できました。
- ・生徒にとって、インターネットって見るだけじゃなくて、自分から積極的に参加している授業を通して、世界が広がるのが実感できます。
- ・世の中はすごく便利になって、遠く離れた外国の人と知り合うのも簡単にできるなあと思いました。
- ・私は中国からの留学生として、台湾の小学生たちに日本のことを紹介することは、国際的な異文化コミュニケーション活動を通して、さらに強く自分も国際協力に貢献したいと思えるようになりました。

今までの授業は、対面式なので、生徒たちの反応から授業内容とやり取りは随時対応できます。しかし、オンライン授業は、発言のタイミングが何となく難しかったり、自分の発言への反応が汲み取りにくい分疲れます。オンライン授業の方法をどのように改善するかが今後の課題として残っています。

COVID-19の影響で、今後は対面式授業を行うことは難しいと思いますが、オンラインツールを使えば、空間を越えて、国際交流活動の実施は容易になりました。台湾の方々は一進国として、外国に行くことは難しくありません。ところが、たくさんの途上国の子どもたちは母国から出たことがなく、外国の方との関わりも少ないため、海外の暮らしや文化について触れる機会があまりありません。オンラインツールを利用し、異文化コミュニケーション授業を通して、世界中の人達に、日本のことを紹介できればいいと思います。

海外教育実践研究 D 感想レポート

先端教科・領域開発研究コース

20195601P 井口 元貴

(授業を終えての感想)

コロナウイルスの感染拡大により、現地での授業実践は叶わなかったが、インターネットを活用したリモート型授業を通して、台湾の児童とつながることができたことは非常に貴重な経験であったと感じている。授業者側の問いかけや実演に対して、児童の反応がよく、活発な相互交流を行うことができたと同時に、台湾の児童（4年生）の英語力に驚きを隠せなかった。今後は、台湾の小学校英語教育の実態や工夫点を知り、日本の英語教育に応用していきたいと感じた。また何よりも、大学院生、学部生、現職の先生方、指導教員全員が一致団結ながら、協力・連携してよりよい授業づくりのために何度も練習したり、意見を交換しあったりしたことが大きな財産であると感じている。今回の授業を通して、一人一人の専門性や良さが生かされ、お互いにウィンウィンな関係性の中で物事を進めることの大切さに気付かされた。今後の教員人生の中でもこの考え方を生かしていきたい。

(工夫した点、頑張った点)

オンライン授業を行う上で、やはり、いかに分かりやすく簡潔に相手に情報を発信するかに注力した。文字過多にならないように、視覚的な手掛かり（動画や画像、イラスト）を交えるように工夫を凝らした。また、一方的な説明にならないように、クイズや簡単な発問を織り交ぜながら、お互いに「やり取り」を行うというイメージで授業を構成した。さらには、日本の歴史や文化をよりよく伝えるために、うまく台湾と比較させながら伝えることを工夫した。

加えて、チームメンバーと絶えず協力・連携し、適切に役割分担や情報交換を行いながら授業づくりを行うことを意識した。1人だけが頑張るのではなく、お互いがサポートしながら進めることを心掛けた。

海外教育実践演習 台湾

先端教科・領域開発研究コース

20195608G 金澤直哉

今回の海外教育実践演習の授業を通して私は大きく2点のことを学んだ。

1点目：仲間と協力することの大切さ

今回の授業では、授業以外にも英語の台詞を考えたり、教材を作ったり大変だった。自分たちの班では、パワーポイントや英語の台詞を google drive で共有しながら作業をすすめたことで効率よく授業を考えることができたと思う。教師は職業柄、時間に追われることがあると思うので効率よく進めることも大切だと実感した。

2点目：他チームとの連携の重要性

今回の授業では、模擬授業を通してほかの班の進み具合や良いところを把握することができた。「4年生にはその英語だと難しいんじゃないか」「クイズをした後に活動したほうがいいんじゃないか。」など、自分たちの班だけでは気づけなかったことも、ほかの班と協同することで1つの授業をよりよくすることができたと思う。

実際に台湾の子供たちに授業をしてみて、子どもたちの英語力だけでなく教師の英語力に驚いた。教師の力量次第で子供たちの学びが変わってくるため、自分自身の英語力を高めていきたい。

海外教育研究を履修して

文理深化・英語コース

20195222G 吉井 千秋

昨年度の短期研修が中止になり、昨年度の海外教育研究を履修していた皆さんのところに飛び入りで参加させてもらいました。おせち料理を紹介するグループに入り、これまでのプレゼンを基に、小学校教員の視点で意見を出しながら、修正を加えていきました。

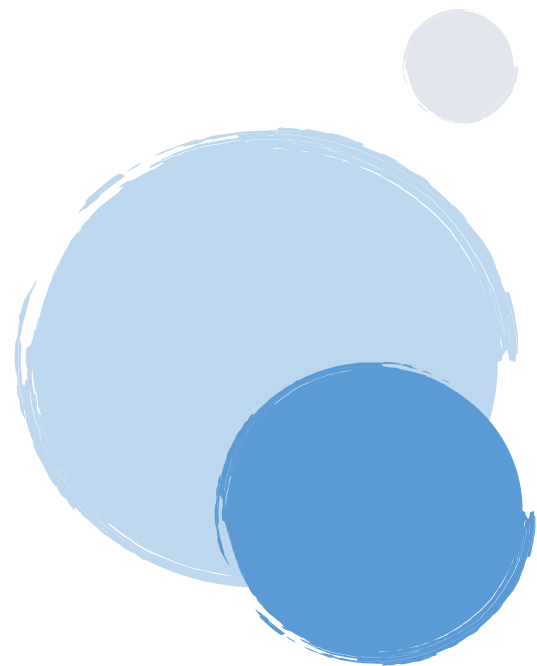
特に気を付けたことは、次の3点です。まず、台湾の小学生にとって「聞きたい、おもしろそう」と思える内容を構成することです。日本のお正月を紹介するといっても、ただの情報押し付けにならないように、クイズを入れたり台湾との共通点を示したりするようにしました。次に、分かりやすく、短時間でも楽しめるアクティビティーにすることです。今回はリモートで授業を行わなければならなかったため、直接子どもたちに働きかけて活動をコントロールすることが難しいことから、ルールが単純で危険性が少ない福笑いを選びました。最後に、プレゼン資料は短く分かりやすい言葉で作るように心がけました。

プレゼン当日は、台湾の小学4年生2クラス合同の授業を行いました。お正月やおせち料理に対する考え方が日本と台湾で似ていることは、事前に知っていましたが、「神様を休ませる」という考え方も同じだということ子どもたちから聞き、私自身も驚きました。また、おせち料理のクイズや福笑いのアクティビティーには、積極的に参加していて、子どもたちにとって楽しめる内容にできたことにホッとしました。特に、嘉義大附属小学校の先生方が私たちの意図を組んで動いてくださって、本当にありがたかったです。リモートで授業するのは初めての経験でしたので、子どもたちの反応の細かなところまで確認しながら進めることは難しかったのですが、少しずればあったもの子どもたちとやり取りしながら授業をすることができました。

今回、準備の段階でよかったなと思うのは、スクリプトと質問事項を事前にしっかり用意しておいたということです。これまでの海外教育研究の授業でもプレゼン資料とスクリプトは作っていたと思います。何回も修正を加えたので、「そんなに細かに直すのか」と大変な思いもしました。リモート授業でなかったら、英語への不安からもっと困っていたかもしれません。でも、英語が得意でない私のような小学校教員にとって、実際の授業場面では、とても心強いものでした。修正しながら、話すことや授業の流れがしっかり理解できていたので、落ち着いて進めることができました。もう一つは、事前に子どもたちからの質問をもらっていたということです。こちらも、どのように答えようか準備をすることができました。当日、質問タイムに画面の向こうで話す子ども声聞き取りづらかったのですが、何とか聞き取れたワードから、「この質問だな」とこちらの回答に移ることができました。もちろん聞き返しはしましたが、何度も言わせられると、英語が堪能な台湾の子どもであってもきっと嫌な思いをします。学習してきたことを使って交流できたんだという思いをもたせることは、日本の英語教育とおそらく違いがないのではないかと思います。

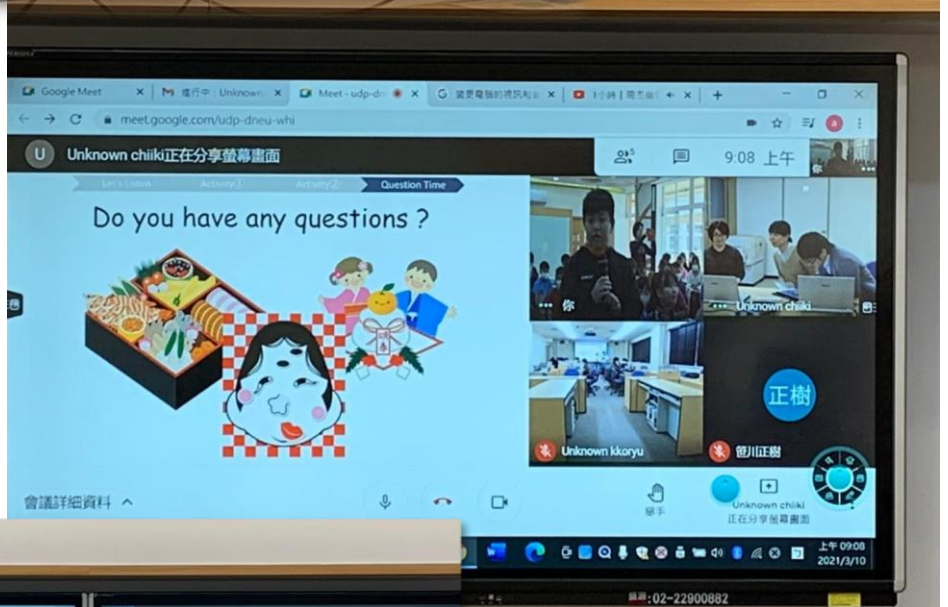
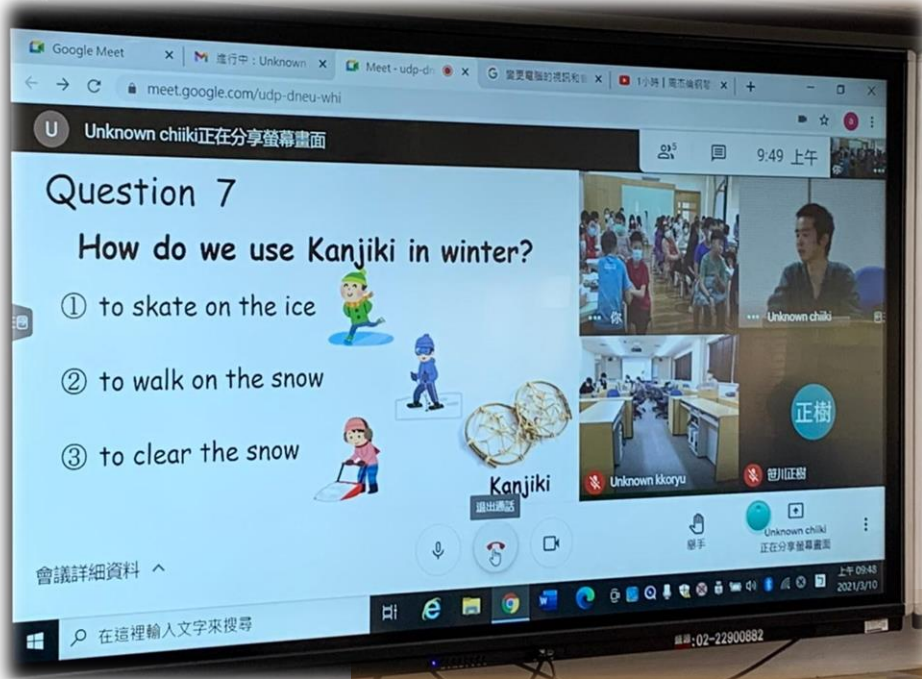
例年がない方法での授業となりましたが、国際交流担当の皆様のご協力もあり、とても充実した研修となりました。ありがとうございました。

記録写真



嘉義大学附属小学校からの写真







記録写真

